

J・H・シーリーと新島襄



北垣 宗治

新島襄がアーモスト大学から精神的・人格的な影響を受けたとすれば、それはおもにシーリーを通してであった、という命題に対して疑いをさしはさむ余地はないであろう。シーリーから決定的な影響を受けたもう一人の日本人が内村鑑三であることは、彼の自伝『余は如何にして基督信徒となりし乎』にてらしてあきらかである。しかもその内村をシーリー学長に紹介したのは、ほかならぬ新島であった。シーリーとはいったいどのような人であったのだろうか。

若いシーリー (Julius Hawley Seelye, 1824—1895) がアーモスト大学に編入学したのは一八四六年、彼が二十二歳のときであり、しかもギリシア語の準備不足とい

うことで、条件付きで入学を許可されたという。しかしやがて頭角をあらわすようになり、三年後に卒業する時には成績順位が三番だった。彼はオーバン神学校に進む。この神学校時代に彼の親友となったのが、のちにアメリカン・ボードの総主事をつとめるN・G・クラークである。神学校を終えたところでアーモストのヒッコック学長から母校のチューターになるように、との声がかかるが、彼はこれをおわってドイツのハレ大学に留学して一年間神学を勉強する。帰国後ニュー・ヨーク州スコネクタデーでオランダ改革派の牧師となり、五年間牧会に従事した。

一八五八年、母校に哲学教授の空席ができたので、ストーンズ学長から呼ばれて大学教員となった。その職名は正式には「精神ならびに道徳哲学教授」(Professor of Mental and Moral Philosophy)であって、現在の日本の大学が設置する哲学や哲学概論や倫理学とは内容もニュアンスもいくらか異なるように思われる。シーリーは独創的な思想家ということではなかったようだが、プラトン、アリストテレスからカント、ヘーゲルに至る西洋哲学の主流を正統的キリスト教の視点から把握していた。スコネクタデーでの牧師時代に、当時哲学者として令名の高かったローレンス・P・ヒッコック博士に親炙し、そ

の指導を受けたのだった。ヒッコックはシーリーの伯母の夫であり、従って義理の伯父にあたる。晩年のヒッコックはアーモストに住んでいたから、新島もヒッコック博士に面識があった。

新島がアーモスト大学に学んだのは一八六七年——七〇年の三年間である。この当時シーリー教授が授業で用いた教科書はウェストミンスター・カテキズムの「小教理問答」(Shorter Catechism)だった。この書の冒頭におかれた有名な問題は、「人生の主たる目的は何か?」「人生の主たる目的は神を賛美し、永遠に神を楽しむことである」であった。これに続いて、神の本性や人の義務に関する百七組の問答が載っていた。シーリーは現在の日本のキリスト教主義大学におけるキリスト教学にあたる科目を担当していたわけである。その授業は講義というよりソクラテス的な対話を中心であった。のちに新島のルームメイトになるW・J・ホランドははじめてシーリーの哲学の授業に出た日の感想を、一八六八年八月二十九日付の両親あての手紙で次のように報告している。

今朝、ジュリアス・シーリー教授の最初の哲学の授業がありました。シーリー教授は本当にすばらしい人です。形而上学者として先生はこの国で誰にもひ

けをとりませんし、人間としても高潔な方です。ジュリアス先生のクラスでは、つめこんだ頭の中味を繰返し吐き出すだけではだめで、先生は学生に全部の能力、つまり判断力、分析力と総合力の一切を行使させます。神がご親切にも理性的な人間に与えて下さったすべての能力をです。この教授は生き字引です。ぼくはこの先生の下で、もつと立派な人になり、そしてもつと立派なクリスチャンになりたいと思います。なぜなら、先生は学問以外に純粹な敬虔さと堅実な性格を備えておられるからです。

新島襄がハーディーの暖かい配慮のもとに、一八六七年八月三十一日に、約四時間の汽車の旅をしてはじめてアーモストに到着した時、駅に出迎えたのがシーリー教授だった。新島は北寮に入寮するまでの三週間、シーリー家に滞在している。寮生活に最低限必要な寝具、家具がととのわなかったためである。

シーリー夫人は非常に愛情こまやかな、賢夫人であつたにちがいない。夫妻の間に一男三女があり、長男のウィリー(ウィリアム)や、長女のベッシー(エリザベス)、次女のアニー(アンナ)は新島に非常になつくようになる。これは新島の英文書簡集のなかにあるウィリーやベ

ッシーあての手紙が証明する。(ちなみにウィリーのために新島の友人のホランドがしばらく家庭教師をつとめる。ウィリーは一八七九年にアーモスト大学を卒業し、のちにオハイオ州のウスター大学のギリシア語の教授になる。)シーリー一家の人々は新島を家族の一員のように待遇した。大学に入学して一年四か月たった頃、新島はアンドーヴァーのミス・ヒドンあてに、幾らか誇らしげに次のように報告している。

ぼくは〔寮の〕部屋に住み、そこで勉強し、食事はシーリー教授のお宅で頂いています。教授は二、三週間西部に出張され、この前の月曜日に帰宅されました。お留守の間ぼくは食卓では教授の席に坐り、食前の感謝をささげました。

新島はシーリー夫人を「私のアメリカの母の一人」と呼んでいる。シーリー家のなごやかな雰囲気をもいきいきと伝えてくれるのは、新島がシーリー夫人あてに一八七〇年四月十九日付でヒンズデイルで書いた手紙の一節である。

お別れしてからもしばしば皆様のことを思い出しま

した。お宅で楽しかった一切のことが浮かんでくるのです。私が病気のとき、何というやさしい愛情と親切なお世話にあずかったことでしょう。あの冷たいアイスクリーム、とびきり上等のピフテキ、牡蠣のスープのすばらしかったこと。日曜日の夕方ごとに奥様と子供たちのすばらしい歌を聞く楽しさ。ゲームで私が勝ちそうになると、ウィリー君が興奮した顔つきを見せる面白さ。ベッシーちゃんとアニーちゃんが私の部屋に遊びにくるときの二人のやさしさとあどけなさ。私にはすべてが甘美で楽しく、まるで目の前にかかっている一幅の絵を見るような心地が致します。奥様と先生から受けたご恩に対し、感謝申し上げます。私の霊が存続する限りこのことは忘れません。

フーズ (Claude Moore Fuess, *Amherst: The Story of a New England College*, Boston: 1935) によると、一八五八年にシーリーがアモスト大学の教授になる直前のころの学生たちの評判では、「最も偉大で最も善良な人はヒチコック、最も目の利く(ギリシア語同様に学生を覚えている)先生はタイラー、最良の教師はスネル、最も深い思索家で最も完全な雄弁家はヘイヴン」とされていた(一八〇

頁)。ヒチコック教授はアモストの第三代学長エドワード・ヒチコック博士の子息でアモスト大学を一八四九年にシーリーと一緒に卒業した人で、生理学、衛生学、体育を教えた。天真爛漫の先生で、動物の背骨の進化を説明する日にはいきなり教室で四つんばいになってみせたとという。全米における保健体育の指導者として名声がとどろいていた。タイラー教授はアモスト大学一八三〇年の卒業生で古典語を教えていた。新島がタイラーからギリシア語を習ったかどうかはわからないが、彼の説教は何度となく聞いた筈である。彼は理事会の委嘱を受けてアモスト大学五十年史を書いた人でもある。スネル教授はアモスト大学の第一期卒業生で当時七十歳に近く、数学と自然哲学を教えていた。四十年間以上にわたって母校で教えてきた。アモスト大学の又シ的な存在だった。新島はスネルの自然哲学や物理学を聴講している。ホランドがはじめて新島の存在を意識するようになったのも、このスネルの教室においてであった。ヘイヴン教授はアモスト大学一八三五年の卒業生で道德哲学と形而上学の教授であった。当時のアモスト大学の教授陣は二、三の例外をのぞき、すべてアモスト大学の卒業生だったのである。ところで、シーリーがアモストに招かれたのは、ヘイヴン教授がシカゴ神学校に抜

擢されたためであった。母校に着任したシーリーは徐々に地歩を固めていき、やがては教授陣中の重鎮として認められるようになり、その名声はスターンズ学長のそれをしのぐようになったという。

シーリーは身長六フィートの大男で、がっしりとした体格、朗々とした音声、悠揚迫らぬ落着きと相俟って、巨人の風格を備えていた。フィーズから彼の面目を伝えるエピソードを引用したい。リー將軍が降伏して南北戦争が終結したというニュースがアーモストに伝わり、全学生が興奮の渦にわきかえって町の広場にとび出した時、尊敬するシーリー教授が歩いてくるのに出会った。彼らはそこで教授にスピーチをお願いした。すると教授はおもむろに姿勢を正してこう言った。「諸君、われらは敵に打ち勝ちました。さあ今度は、われら自身に打ち勝つ番です。」学生たちは冷水をぶっかけられたように、「すべしと引き揚げたのであった(二二二頁)。

イフレイム・プリントがシーリーにあてて書いた新島の推薦状は、新島のフィリップス高校時代を集約する重要な文献である。そのなかでプリントは新島が「あなたのご指導の下に精神と道徳の哲学を学びたいと熱心に希望しています」(『新島襄全集』10・79)と書いているが、入学後に新島がシーリーの科目を聴講した形跡はない。

アーモスト大学で個人的に最も親しくしてもらったシーリー教授の授業を彼が取らなかつたのはなぜか。二つのことが考えられる。第一は新島がやや引込み思案であつたこと。第二は彼の英語がシーリーのソクラテックな問答形式の授業をこなせるまでには成熟していなかつた——と私は思う。

二十二年間にわたつて学長を立派につとめたスターンズ博士が一八七六年六月に病死したあと、理事会はそのころ下院議員としてワシントンに居たシーリーを後任に選んだ。彼は二年間という議員の任期をつとめあげたのちにアーモストに戻つた。当時は学長は「アーモスト大学教会牧師」の職にも同時に任職されるのが慣例であつた。

シーリー学長にはきわめて保守的な面と、きわめて進歩的な面が共存していたことは注目し値する。彼はニュー・イングランドの保守的な正統派の神学を奉じていた。ダーウインやハックスリーの思想が自然科学の分野で革命的な衝撃を与えつつあつた時代に、シーリーは進化論を否定し、学長就任演説のなかで伝統的な神学の立場からする進化論の批判を行つた。教授陣のなかの自然科学者たちはシーリーの学長就任には反対であつたといわれる。にもかかわらず、彼はそのような教授たちに対して

もきわめて寛容であり、その故に、却つて尊敬をかちえたのである。

彼の進歩的な面は一八八〇年にアーモスト方式と呼ばれる「学生賢人会議制」を導入して成果をあげたことである。学年ごとの選挙により四年生から四人、三年生から三人、二年生から二人、一年生から一人を選出させ、月に一度、学長の司会で賢人会議を開き、学内の風紀、道徳その他学生生活にかかわる問題を討議させる。退学、停学等の処罰もこの会議をへずには実施されない。学長は拒否権を持つが、それはよほどの場合にしか行使されない。このアーモスト方式は当時全米の大学の注目を集めた民主主義的な制度だった。

信念の教育者であつたシーリーが学生たちに繰返して説いた命題がいくつあつた。その一つは「完全な自由とは、完全な法に従うことである」というもので、これは多分、キリスト教の文脈をぬきにしては理解しにくい表現である。彼が一八六九年に発表した「罰——その意味と根據」という論文は、ホランドによればアーモスト大学での講義の内容だということだが、その中に「社会にとつての至高善は主権者の権威を維持することである。主権者を打倒することは社会を破壊することである。」「臣下の自由意志は正当な主権者に服従することの

なかにのみ維持される。不従順は自由の放棄である。」といった表現が見出される。主権者を神に、臣下をキリスト者に置き換えれば、その主張はストレートに理解できよう。しかし主権者が不正義である場合にはどうするかというロツク的な問題にはシーリーはあまり関心をもたなかつたように思われる。このようなシーリーに呼応するかのように、新島の方でも一八八一年七月十一日付のシーリーあての手紙の中で、日本国内で「ミル、スペンサーの恥ずべき追従者」がキリスト教を攻撃するのにやつきになつてゐることを訴えている。

新島は彼が最も重視する問題についてシーリーの助言を仰いだ。一八七二年春に田中不二麿文部理事官の強い要請に応じて、ヨーロッパへ同行すべきかどうかの問題で迷つていた時、シーリーから、行くがよいとの助言を得て大いに意を強くしている。一八八五年秋に在米中の新島が書いた「日本におけるキリスト教主義高等教育のために訴える」という長い英文の趣意書に対して、シーリーは新島の求めに応じてこの趣旨に賛同する一文を書いている。

シーリーは一八九〇年には健康の衰えを感じて学長職を辞することになつた。それに先立つて、彼は新島にアーモストの名譽学位を与えることに成功した。これがシ

リーから新島への最後のプレゼントとなった。新島は一八八九年九月三日付の手紙で名誉学位に対する礼状をしたため、その中で

敢えて申し上げたいことは、私が先生から与えられた道徳的、宗教的影響は常に私の中に生き続けており、意識的にか無意識的にか、それが外にあらわれにくるということです。その故に私は先生に負うところ甚大なのであります。

と書いた。シリーの新島評は「金をメツキするわけにはいかない」という短いものであったというが、シリーの影響の本質を見きわめるためには、今後さらにシリーの著作の研究が必要となるであろう。

(敬和学園大学長)

追悼集——同志社人物誌

同志社では明治二十年ころから、社長（総長）をはじめ役員、卒業生、教職員、学生生徒が永眠すると、その死亡記事とともに、追悼のことがや故人の略歴などを各学校の機関誌（たとえば『同志社文学』『同志社女学校期報』『同志社校友会報』『同志社時報』など）に掲げて哀悼の意を表してきた。その貴重な記事は、これまで古い機関誌の中に埋もれていて、極めて利用しがたい状態にあったが、社史資料室は先年来、それらの記事の総てを探し出して書物にまとめる作業をおこなっており現在左記の巻を刊行中である。

- 追悼集 I——同志社人物誌 明治十年代～明治四十年
- 追悼集 II——同志社人物誌 明治四十一年～大正四年
- 追悼集 III——同志社人物誌 大正五年～大正十五年
- 追悼集 IV——同志社人物誌 昭和二年～昭和六年
- 追悼集 V——同志社人物誌 昭和七年～昭和九年

(頒価一、五〇〇円)

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
〇七五—二五一—三〇三七・八



J・H・デフォレストと新島襄

若山晴子

J・H・デフォレスト (Rev. John Hyde DeForest. 一八四四—一九一〇) と言ひ新島襄 (一八四三—一八九〇) と言ひ、私の関わっている神戸女学院の歴史を大まかに述べる限りでは、同じ伝道団 (Mission) の事とは言へ、所属の伝道区 (Station) も違い活動の領分も違い、直接に殊更親密な交わりを持った存在として紹介したり論じたりすることはなかつたと記憶する。しかし、機を改めて仔細に見てゆくと、この三者の間にある縁の絶妙さには、少なからず心そそられるものがあつた。

この縁、端的に言つてしまへば、まず第一に、新島襄とJ・H・デフォレストとは、同じ時期にアメリカカンボディア (American Board of Commissioners for Foreign

Missions) の任命を受け、同じ船で太平洋を渡って来た間柄であったこと、第二に、新島襄は J・H・デフォレストの二女に洗礼を授けたが、このみどり児こそ、のちの神戸女学院第五代院長、C・B・デフォレスト (Miss Charlotte Burgis DeForest. 一八七九—一九七三) にほかならないこと、そして第三に、新島襄が東北伝道に着手した時、まっ先にこの地に派遣されたのはこのデフォレスト一家であって、爾来、J・H・デフォレスト夫妻は生涯をこの地方の伝道に捧げて仙台にその奥津城を得、さらに年経てのち、その愛娘 C・B・デフォレストの遺骨もまた、両親のそれと共に在ることを求めてここに帰還したこと (C・B・デフォレストは永年、神戸女学院の優れた教師また院長であったから、その奥津城はこののち多くの同窓生にとって、いわば巡礼地のような色合いを帯びるに至った) である。

とまれ、与えられた主題に副うべく、史料に則して見てゆくことにしよう。国籍を異にするにせよ、世代を同じくしたその壮年期の夢を共に新生日本の教化のために賭けた人々の中でも、新島襄の母国への帰還と行を共にし、なおまたその父の国への帰還を見送った一人のアメリカ人宣教師は、新島襄の人生の道程と具体的にどのような関わりを持ったのであろうか。

新島襄の生涯・事績、またこれに関する史料の解明に贅言を費すことはよそう。これは同志社の独擅場であり、その蓄積の豊かさは私のような部外者にはむしろ重圧であった。許された時間内での捗猟は結局のところ付焼刃のそしりを免れ得るものではないから、この小文は不行届に尽きようかと危惧してもいる。但し管見したところでは、新島襄の書き物の中に「デフォレスト」なる文字の見える所はそれほど多くはなかった。すでに本稿に再々繰り返している船旅についても、一八七四年十一月二十四日付のハーディー夫人 (Mrs. Susan H. Hardy) 宛ての書簡を見ることができたが、そこには「船客の中で宣教師である友人以外には特別な友達はできませんでした。」「宣教師たちも船酔いのために日本語の勉強を中止せざるを得ませんでした。」とあるのみ。晩年、教派合同の問題や東北伝道の具体化に直面した時点では、当然のことながら名差しでの言及も若干残ってはいたが。

片や、J・H・デフォレストの方は—と云えば、残念ながらもまとまった史料はそれほど多くない。まず本人の書いたものとして、アメリカンボードのボストン本部に宛てた個人報告書簡と *A Sketch of the Japan Mission of the A. B. C. F. M., 1869-1904* を、それから C・B・デフォレストによる父の伝記 *The Evolution of a*

Missionary を掲げておく。しかし、史料の紙数は少ないが、この中には何となく「Mr. Neesima」が出て来ることか？ J・H・デフォレストの見る目は広く深く、その語り口には温か味とユーモアがある。彼はその才を惜し気なく駆使して、しばしば、「新島氏」のことをポストン宛てに注進に及んでいるのである。

J・H・デフォレストは会衆派の牧師 W・A・ハイド (Rev. William Albert Hyde) の第五子。彼がデフォレストの姓を帯びて世に出たのは、それが、聖職を志しつつも余儀なくされていた苦学の日々とその苦境を救った奨学金の条件であったからと聞く。彼は、一八六一年にフィリップス・アカデミーを卒業し、代用教員や南北戦争の志願兵としての歳月も加えてようやく一八七一年、イエール大学神学校卒業と共に按手礼を領し、コネティカット州マウント・カーメル (Mt. Carmel) の会衆派教会に着任した。結婚もした。しかしこの若妻は間もなくみどり児と共に天に召され、傷心の牧師の再起はマウント・カーメルの自然と人情に委ねられた。そして一八七三年から七四年にかけてのリヴァイヴァル。牧師は考える。―この地位よりもっと人に望まれず、また人の行きにくい所で……。こうして J・H・デフォレストとアメリカンボードとの交信が始まる。アメリカンボード宣

教師文書のファイルに残るその第一信は四月二十八日付。新島襄のそれに先立つこと二日である。

その第三信七月十日付には、早くも重要人物の名が見受けられる。まず、日本赴任の旅を共にする第三の人物 アダムズ (Dr. Arthur Herman Adams, 一八四七―一八七九)。それから、間もなく新たな伴侶となるミス・スター (Mrs. Sarah Elizabeth Starr DeForest, 一八四五―一九一五)。そして、「日本人の J・新島氏」。次の日曜日に来訪して説教をしてもらうわけにはゆくまいかとの相談である。生身の日本人 'ive Japanese' から話を聞くことは今の私の教会には大変良いことであろうと。もともとこれは叶わなかったと見える。九月十四日付の手紙には、按手礼式に出席できれば新島氏の知遇が得られ、シーリー氏 (Dr. Julius Hawley Seelye) の説教が聞けるとあって嬉しい―とあるからである。ではこのたびの出会いは実現したのであるか。九月二十三日に結婚式を挙げた彼が翌二十四日の按手礼式に間に合ったのかどうか、私は知らない。しかしラットランドに開催されたアメリカンボードの年次総会では、かの、新島襄の壮挙の目撃者となり、従って、日本伝道団の先任者たちのための最も即時的な土産話の無二の語り手となったには違いなかった。十二年後、在米の「親密なる友人たち」に

仙台に学校をたてることになった事情を説明するに際してこの時のことに言及し、あの総会に出席したことは幸いであつたと述懐している。そしてこのたびの仙台の事業は、又しても「新島氏の」学校であつた。

新島襄と、J・H・デフォレスト夫妻、A・H・アダムズ夫妻を乗せた船が横浜に入港したのは、一八七四年の収穫感謝祭の日であつた。新島襄はここから直ちに郷里の安中に赴き、翌年一月末に大阪入りして先任宣教師M・L・ゴードン (Rev. Marquis Lafayette Gordon) の家に身を寄せるが、これより先、家財道具の到着が大幅に遅れたために、J・H・デフォレスト夫妻もまた、M・L・ゴードン方に止宿している。彼がここからボストンに宛てて書いた第一信は十二月十二日付。横浜上陸から一週間後にやつて来た大阪での生活を五頁にわたつて報じたあと、最後の一頁を早速、「新島に関する情報に捧げた。まず旅の船中で、あるドイツ商人から『Love you』にあたる日本語を問われた新島襄が、訊き手の下心を察して、自分はクリスチャンであるからその種の知恵は貸せない」と二つもなく答えたこと。「ハーディー大佐はこの話をきつと面白がつて下さることでしょう」と結ばれている。続く一節は、大阪の教会員の始めた小さな学校が神のお導きによつて「新島のカレッジ」となるこ

とはあるまいか—との、初々しい期待を開陳する。「かくてこれは、生命いのちの水の流れの源となることでしょう。そうなりますように。」…その源がもつと奥地に在つたことを人々はやがて知るであらう。

新島襄は一八七五年六月に京都に移転、同年十一月に同志社英学校を開校し、翌年一月に結婚した。この時期、J・H・デフォレストは大阪伝道区に在つて地元教会の世話や近隣への伝道活動に当たり、また伝道団内では出版関係の委員として尽力、一八七五年には讚美歌集の編集も…と活躍しているが、新島襄への心配りは変わらず、彼の在阪時代にはその重責を氣遣つてよき家庭の必要を述べ（五月二日付）、同志社開校直前には「京都における我々の勢力について、極度に関心をそそる状況」を五項目にまとめ、新島襄の婚約者山本八重（一八四五一—一九三二）の免職と同志社に対する聖書講義の禁止について報告している（十一月二十五日付）。こうした報告の圧巻は一八七九年の二件。先述の、愛娘C・B・デフォレストの受洗の喜び（五月十二日付）と、またこれと裏腹の、A・H・アダムズ急逝の衝撃（十二月十日付）を伝える件りである。前者の清澄な簡潔さとは対照的に、後者は雄弁に重く新島襄の動哭を把えている。「この日曜日、新島と私は…安中に居りましたが、そこへ肝をつぶさせるような

電報が来しました。アダムズ博士が亡くなって遺体が横浜に在ることを告げるものでした。海老名氏の按手礼式の時でしたが：我らの親愛なる新島がこの悲しい話を聴衆に告げるにあたり、私は、式が終わるまではこのことは黙っているよう頼みました。こういうものを耳にしたのは初めてですが、彼の深い感情は昂まり、彼を征服し、彼のしわがれた声が重い叫びとなって奔りました。『おおアダムズ博士！ああアダムズ博士！彼は、日本のために、生命いのちを捧げました！』かかる途切れ途切れの絶叫に私も宣教師たちと全聴衆は我を忘れ、しばしすすり泣きの声だけになりました。』（…部省略）

J・H・デフォレストの新島襄に注ぐまなざしは終始温かく好意的である。しかし意見の不一致がなかったわけではない。というよりも、伝道事業や教会活動の実践に関しては、むしろ対立することもしばしばであった。自給自営 (Self-support) の考え方然り、教会合同の解釈また然り。東北伝道の発案についても、新島襄の示唆によるポストン本部からの照会に対し、J・H・デフォレストが「七箇条提題」(何という機智であろう！)をもつてした答えは「否」であった。この提題は幸いにしてかたくなではなかったが、伝道団にとつてとりわけ重大な意味を持ったこれらの諸問題における不一致は、新島Ⅱデ

フォレスト間に維持された好ましい関係が単に気の合った者同志のそれとは別の次元のものであったことを証して、興味深い。

伝道団の現場に在る諸教会の自給自営はアメリカカンボドの基本方針の一つであった。とは言えこれは、宣教師派遣先の国情によつては勿論、同じ国内でも地域によつて大差がある。日本伝道団はまず開港地神戸に、続いて商都大阪に、それからかつての都京都に、と伝道区を開設したが、これら三市が相互に全く対蹠的な性格を保持していることは論を俟たない。当然、伝道の仕方でも教会の運営も方策を異にせざるを得なかったが、この自給自営の方針を最も強力に打ち出したのが、大阪伝道区のH・H・レヴィット (Rev. Horace Hall Levitt) と大阪教会の澤山保羅であった。そしてJ・H・デフォレストはこの伝道区の一員として、彼らの道の潔いさぎよさを肯定する。この観点からすれば、新島襄の立場は不甲斐なく見える。…もつとも彼は、澤山保羅の道の実践がいかに辛く困難なものであるかを悉ことごとく知っていた。…神戸女学院草創期の婦人宣教師たちが、度々、自立経営は切実な目標ではあるが今はまだその時ではないとポストンに書き送っていたことが思いおこされる。

新島襄の晩年の煩いとなったことの一つ、教会合同の

問題に関しては、実に珍しいことにJ・H・デフォレスト宛ての書簡があり(一八八八年十一月二十八日付)、その読後感はただ「慎重」の一言に尽きるが、同じ頃その問題を議するために召集された会合からの帰路、J・H・デフォレストは、「長老派は会衆派を併呑してしまうであろうなどという陳述…、またその上新島氏が、これについては意見を述べるのも充分な討議に賛同するのめ気が進まないということ、私どもの代表の多くに、何か自分たちのために落とし穴でもあるかのような疑念を持たせました。」と書く(十二月一日付)。J・H・デフォレストは新島襄によれば「グリーン博士にひっさらわれて」いた賛成派の一人であった(一八八七年十月二十七日付書簡)が、C・B・デフォレストは、父の信仰の基調が極めてエクメニカルな宗教上の寛容に在ったことを明かにした。それで彼は、日本におけるキリストの勝利は教派の分裂によって滞っている―と信じるに至る。日本のキリスト教の未来のために必要なのは、教会行政やばらばらの信仰宣言やの遺産ではなく、キリストを述べ伝えることである―と。しかしこのような靈性は当時のピューリタンには全く稀有なもので、殊に正統的立場からすれば理解の外のことであった。

これより先一八八六年の東北伝道の着手に際しては、

新島襄はためらいなくJ・H・デフォレストの名を挙げ、て事を計り、また実行を委ねた。前述の提題の主眼は、現状ではいづれの伝道区にも割愛可能なほどの人手はないということであったが、賜暇婦米明けのW・W・カーティス (Rev. William Willis Curtis) と新任のF・N・ホワイト (Rev. Frank Newell White) の着任を見て、新島襄の夢は軌道に乗り、一八八七年六月、仙台に東華學校が開校した。開校に至る長老派伝道団との交渉の経緯は同志社と東北学院の百年史に詳しいが、J・H・デフォレストは当初、「この事業を無理なく、また私の知る限り不和も悪意もなしに、私どものものとならしめるのは、新島の名以外の何ものでもないということは、全く明らか」であると喝破している。(一八八六年六月一日付)。新島襄の熱意に励まされその名声に支えられて建ったこの學校が閉校したのは、新島襄の長逝から一年余りのことであつた。世論の国粹化に追従した理事會がキリスト教との絶縁を公示したため、宣教師たちの総辞職となつたものである。彼らは野に帰り、一般の伝道活動に専心する。その野は、新島襄が「仙台、それがだめなら若松」に拠点をおいて…と企図した東北地方全域(W・W・カーティスは北海道への道を開く。)であつた。

(神戸女学院大学助手・史料室勤務)



田中源太郎と新島襄

高久嶺之介

はじめに

丁R亀岡駅から西南に少し歩いたところに田中源太郎の生家がある。そこに田中の子孫の方は現住せず、現在は、料理旅館「保津川観光ホテル・楽々荘」としてその大邸宅が受け継がれている。邸宅内の洋館は二階建の煉瓦作りで、ちりばめられた数々の装飾は、明治中期京都府納税額のトップに位置した往時の繁栄ぶりを思わせるに充分である。広大な庭園は当代の庭園師小川治兵衛によって造られている。八月初旬のある日、ここを訪れた私は、大邸宅の豪華さと亀岡市中にもかかわらずあまりの静けさに不思議な感があった。

田中源太郎は、明治・大正期を通じて京都府政財界のトップに位置した。そして新島の大学設立運動では、当時の北垣国道府知事とともに、京都府会議長としてきわめて大きな役割を果たす。田中とそのグループ（浜岡光哲、大沢善助、中村栄助、内貫甚三郎、雨森菊太郎など）がいなかったならば、新島の大学設立運動は、けっして順調には進行しなかつたであろうことは疑いを得ない。

後述するように、田中は新島の大学設立運動に当初慎重な態度をとつたが、新島は運動への田中の関与を執拗に希求した。その理由は、次のように要約できよう。周知のごとく新島の大学設立運動は一八八三（明治一六）年から本格的に開始され、新島の死に至るまで全国的に募金運動が展開されていくことになるが、その土台を構成するのは京都府での募金活動であつた。このためには北垣京都府知事のみならず、京都府の名望家、具体的には京都府の政財界、すなわち京都の府会議員、京都商工会議所に結集する京都財界の関係者の支持と支援を得なければならぬ。田中は一八八四（明治一七）年の時点で、地租額五二〇余円という府下第六位の大地主であり、一八八四年一月の京都株式取引所頭取を端緒に数年をして京都財界のトップに躍り出る実力者であつた。しかし、新島にとって、彼のそのような経済的位置もさることな

がら、より政治的位置が重要であつた。田中は一八八二（明治一五）年三月には京都府会議長、同年四月には郡部会議長を兼ねていた（府会議長は、一八八二年三月より一八九〇年七月衆議院議員に当選して府会議員を辞退するまで）。京都府政界の完全なるトップの実力者である。新島の京都での募金運動は、京都府当局とともに、府会議員クラス、とりわけ府会議員中議長・副議長・常置委員など府会の役職者にターゲットを定めたものであつた（京都府で取られたこの方式は、その後他府県での募金活動でも踏襲される）。府会議長という職からして、田中の支援なくして、京都での大学設立運動は成功しなかつたのである。

田中は、一九二二（大正一一）年、郷里の亀岡から京都への鉄道での帰洛の途路、清滝川鉄橋上流の地点で列車の脱線転覆事故で川中に墜落し七〇歳の生涯を閉じた。一九三四（昭和九）年田中の号である水石会より五〇〇ページ以上の大部な『田中源太郎翁伝』が非売品で刊行されている。この書は、京都の政界と財界での田中の活躍ぶりについては、それなりに詳細に記述されている。しかし、新島との交流については全くページを割いていない。ここでは、紙数の関係もあり、田中が新島の運動に関与するまでを中心に素描する。田中について述べるとすれば、当然先述の田中グループ（ただし政治的にいえば

中村栄助は明治二〇年代中期には田中グループを離れる)全体に触れなければならないが、ここでは紙数の関係で触れることができず、その全体の素描は別の機会としたい。

一、田中源太郎の位置

田中の経歴については、『田中源太郎翁伝』が詳しいが、三ページ程度でその概略がつかめるものとして一九六一年非売品で発行された京都府議会事務局編『京都府歴代議員録』の「田中源太郎」の項目が便利である。詳しくはそれらを見ていただくとして、大まかに田中を考える際のポイントを指摘しておこう。

第一は、浜岡光哲と比較しての田中の性格である。田中と同年齢の従兄弟である浜岡との関係について『田中源太郎翁伝』は、次のように記す(三二二ページ)。

両者の性格は全く相異なり、田中翁の細心周密、計数の才に長じ、飽までも現実立脚した実行主義者であったのに反し、浜岡翁は放胆にして鷹揚、現在に拘泥せない理想主義者であった。この相反せる性格が、反って長短相補ひ、有無相通ずるの妙機を生み、一事を成し、一業を起すに当たっては、田中翁

は内に、浜岡翁は外に、恰も女房と亭主の如き役割を演じ、共に無くてはならぬ大切な両柱となつて、互に苦を分かち、業を共にし来つたのは、奇しくも亦床しき因縁ではある。

田中と浜岡の関係は政治的にも経済的にもほぼ一身体のような関係であつた。浜岡自身「一事が万事公私生活を通じて恰も影に添ふが如く、私のある所必ず田中があり、田中の存する所、又必ず私があつた」と回想している(『田中源太郎翁伝』三七八ページ)。しかし、両者の性格の違いは、同じ山本覚馬の門下でありながら早くから新島との関わりを持ち、その活動を支援して来た浜岡に対し、田中の場合、大学設立運動への微妙な対応の違いを見せる。

第二は、山本覚馬との関係である。田中を山本に紹介したのは浜岡であつた。浜岡の伝記『浜岡光哲翁七十七年史』は、次のように記している(六四〜五ページ)。

後に山本氏の妹婿たりし新島襄氏の同志社創設は明治八年にして、翁は山本氏との関係により、之に対し直接間接尽力せること少なからず。翁の田中源太郎氏を氏に紹介せるもその当時なりしが、其の他、

雨森菊太郎、垂水新太郎、大沢善助、中村栄助の諸氏、又相前後して氏の門に入り氏の誘掖をうけ、後年府市の事業に参画するの素地を作りき

ただし、『田中源太郎翁伝』を見るかぎり、一九二九(昭和四年)に発行された大沢の伝記、および浜岡の伝記に比較して、山本の影響力が顕著に見られるという感じはない。田中の伝記では、漢学を学んだ北村龍象や横井忠直に比較して山本との師弟関係の記述は薄い。浜岡と田中では、山本との距離は微妙に異なるのかもしれない。そして、そのことが当初容易に新島の運動に関与しなかつた遠因になるのかもしれない。

第三に、田中の経済的位置である。田中は、一八八四年京都株式取引所を皮切りに数多くの会社の役員になる。それらの会社は、京都商工銀行を金融の核として、京都電燈会社、京都倉庫会社、京都陶器会社、関西貿易会社、京都織物会社、北海道製麻会社、関西鉄道会社など多数にのぼる。その際、明治一〇年代後半から二〇年代初頭にかけて勃興してくるこれらの会社の多くは、北垣府政の民間資本育成政策のもとで大きく伸びた企業であった。田中が関係した会社は、具体的事実は省略するが、当時の京都府当局に様々な恩恵を受けていた。そし

てこれらの会社には、浜岡、大沢、内貴などが関係していた。したがって、明治二〇年代、批判勢力による田中グループに対する批判は同時に北垣批判になっていく構造が存在していたのである(この点では触れない)。

第四に、田中の政治的位置である。田中は、一八八〇年三月府会議員の補欠選挙に当選し、その後連続四選し、一八九〇(明治二三)年衆議院議員当選により辞任する。衆議院議員は一八九二年二月、一八九四年と連続三選し、同年六月の解散まで勤める。一八九七年九月には多額納税者互選議員となり一九一八(大正七)年満期となるまで前後一四年にわたって在任した。田中の政治的姿勢を明確に示すのは、一八八九年二月彼や浜岡や大沢、雨森らが中心になって組織する京都公民会である。この政社は、明確に自由民権運動と一線を画していた。田中や浜岡は衆議院では、当時の反政府勢力からは「吏党」と目された大成会に所属した。田中自身、自由民権運動に何らかの関わりを持ったことはなく、常に現実的政治家であり、経済人であった。つまり事象への現実的対応が彼の行動の特徴であった。

以上のことは田中という人物を考える際の最低限のポイントである。

二、田中の大学設立運動への関与

田中と新島の出合いは、大学設立運動を通してであり、二人の間を取り持ったのも浜岡である。田中・浜岡は、山本覚馬の同門であったから、山本・浜岡との関係からしても、たとえ親しく接触する関係でなかったとしても、新島は資料で登場する一八八三年以前に田中に接する機会があったであろう。

一八八三年七月二〇日、新島は田中に対し書簡を寄せる（『新島襄全集』第五卷―以下『全集』と略称する―、二四〇～四一ページ）。書簡は、浜岡氏より承ったところによれば、御家族中に病人がいるとのことだが、よほどの大患かどうか伺いたい、何分炎暑の中であるので十分ご撰生ありたいとの言葉から始まる。ついで大学設立募金の方法について概略を述べるわけであるが、浜岡と新島との運動での親密な関係を印象づけるように文が展開され、さらには募金方法についてのご意見を伺いたいという形でかなり丁寧な形で文が綴られている。田中と浜岡との関係を通して、何としても運動への田中の支援を取り付けたいとの新島の思いが伝わってくる文である。これについて田中の対応は不明であるが、同年一〇月一日の

新島より田中宛書簡（『全集』第五卷、二四五ページ）に「貴君之如き兼而より御賛成被下候」との文があることから大学設立についての原則的な賛成は与えていたのである。この一〇月一日の新島の田中宛書簡の内容は、①「法律専門校」の設立について京都府郡中で発起人を募集しているのは、是非発起人になっていただきたい、②近日中に発起人会を開き、発起人の心得ならびに募集方法を協議したい、③発起人は郡区中三〇名くらいのもりである、④発起人会議を開く際には、田中、浜岡、山本、中村栄助、新島などの名前で書状を出したい、というものであった。新島は、このころ浜岡と協議したうえで、京都府会郡区の常置委員を発起人とする意向であったから（『全集』第一卷、一八六ページ）、発起人会議を招集する際にどうしても府会議長である田中の名が欲しかったのである。

しかし、田中の返事は新島の期待を裏切るものであった。一〇月二日付の田中の返答は、法律専門学校の設立発起人になることを辞退し、普通の賛成者の中に入れてくれるように要請するものであった（田中より新島宛書簡、『全集』第八卷、二七〇ページ）。したがって一〇月四日、大学設立発起人加盟の依頼書は、田中を外し、山本、浜岡、中村、新島の四人の連名で京都府区部常置委員およ

び郡部常置委員に送付されたのである(『全集』第一巻、一八六〜七ページ)。諦め切れない新島は同日改めて田中に書簡を送り、再度発起人に加することを訴えた(『全集』第三巻、二四六ページ)。おそらく浜岡との協議の上の処置であろう。以下の文は、新島にとって府会議長である田中の帰趨が、京都府下での大学設立運動の成否を握っていると認識されていたかがよく分かる文である。

(前略) 貴兄ニハ当春モ大学之為ニ大ニ御配慮被下、特ニ府会議員ニ向ヒ懇ニ御説諭モ有之候次第、万一貴兄ニシテ御辞退アラハ恐クハ郡中ニテ誰モ人モ承諾スルモノハアルマジト懸念仕候、且郡中ノミナラズ、区中之人ニモ貴兄ニシテ御加入ナキ上ハ奇異之感情ヲ惹起シ、我モ我モト辞退サル、事ハ小生輩之疑ヲ容レサル所ナリ、卑見ニヨレハ今回京都管内ニ於而発起人ヲ募ルノ成否、特ニ貴兄ノ承諾セラル、ト否トニ関スヘク候間、土地之懸隔ヲ以テ御辞退アレトモ、発起人ニハ一回御集會ヲ相願候ハ、決シテ度々京都迄玉足ヲ勞スル事ハアルマジト存候、且有名無実ト被仰候得共決シテ不然、兄之一諾克ク衆人ヲ動スヘキ事ナレハ、右様之御謙遜無之様仕度、(後略)

新島は、一週間後の一日、京都市中で田中に会う。田中は、その辞退の理由についてこう語った。近年米価、地価の下落に加えて当夏の早魃により村落は非常に困却している、したがって不景気・不融通を醸し、到底この実況では賛成家を得る見込はない、時期がまだまだ至っていないと考え断然発起人加盟を辞退したのだ、と。経済に明るい田中の言には充分な理があつた。この時期から明治二〇年代初頭まで、国内状況はいわゆる松方デフレという空前の不況期を迎えていたのである。これに対し、新島は、時機を待つといつてもいつその時機が来るか不明であり、「広ク世人ニモ之ヲ広告通知スルコソ一日モ猶予スヘカラス」と反論したが、田中は、「到底見込ミナキモノニ加盟スルハ大ニ心ニ愧ツル所ナレハ、時機ノ至リ見込ノ立ツ迄ハ賛成シ難キ旨」発言した(『全集』第一巻、一七八、一八八ページ)。この夜、三丹地方巡回から戻った中村栄助に田中の件を相談した新島は、中村より高木文平に相談してはと勧められる。翌朝、新島は浜岡の家に立ち寄つて後、高木を訪問し、田中を翻意させる方法を尋ねる。高木は、一応田中に面会することを約束し、再三頼んで応じなければやむを得ない、応じたものだけで発起人とし募集方法を定めて賛成者を募るしか良策はない、と答えたのである(『全集』第一巻、一七八ページ)。当

時高木は初代京都市商工会議所会頭、二日前の一〇日に発起人になることを承諾したばかりであった（『全集』第一巻、一七八、一八八ページ）。

この後どのような田中に対する翻意の工作が行なわれたかは不明である。「同志社大学記事」は、「而シテ其後二至り漸ク発起人中ニ列加セリ」とのみ記している（『全集』第一巻、一八八ページ）。おそらく、その後高木、浜岡らが田中を説得し、翻意させることに成功したのであらう。この工作の過程の史料に中村栄助は登場しても田中と切っても切れない関係になっていく大沢善助は登場しない。一八八四（明治一七）年一月一九日、新島宅で仮発起人の相談会が開かれる。そこには府会議長田中源太郎、副議長西村七三郎や区部会常置委員、郡部会常置委員など府会の役職者、京都市商工会議所会頭高木文平、新島など一二名が参加した。この会合で田中は正式に発起人になる（『全集』第一巻、一八九〜一九〇ページ）。

以後田中の本格的な活躍が始まる。一八八四年四月一日、京都商工会議所で専門学校創立について府下名望家七〇余名（多くは府会議員）を集めた集会が開かれるが、司会をしたのは府会議長田中であった。また一八八八（明治二一）年四月一二日の北垣知事も参加しての知恩院での大集会の司会をしたのも府会議長田中であった。計数

に明るく現実主義者であった田中は、新島に対して様々な現実的提案をしたようである（それは運動のキリスト教色を薄める意味も持ったと思われる）。その点を詳細に跡付けるにはもはや紙数の余裕はない。新島がいかに田中の存在を大きく見ていたかは、次に掲げる新島の二度目の外遊直前の一八八四（明治一七）年四月四日の日記で明らかである（『第二回外遊記（A）』、『全集』第五巻、三二〇ページ）。

此夜、田中、浜岡、高木ノ三氏、襄夫婦ト山本夫婦ヲ中村楼ニ招キ、日本食ノ馳走ヲナシ、送別会ヲナシ呉レタリ。此三氏ノ如キハ、今回専門校ノ談判ニ至リ実ニ柱石ト云ヘキモノナリ。浜岡氏ナカリセハ争テ田中氏モ之ニ応スベケン、田中氏ノ奮発ト周旋ナカリセハ争デカ府会ノ人ヲシテ之ニ応セシムベケン、又高木氏ノ果断克ク田中氏ヲ翼賛スルナクンハ、田中氏モ亦焉ノ如ク速ニ成功ヲ見ルニ得「べ」ケン

（大学人文科学研究教授）

大島正健と新島襄



大山綱夫

札幌農学校の第一期生で、札幌独立キリスト教会(当時の呼称は札幌教会。本稿では以下独立教会と略す)草創期のもっとも中心的存在であった大島正健(一八五九—一九三八)は、生涯二人のキリスト者を信仰の師と仰いだ。ひとり札幌農学校初代教頭のウィリアム・スミス・クラークである。大島はクラークの強烈な感化によりキリスト者となり、また別れゆくクラークの口から「ボーイズ・ビー・アンビシャス」を聞いたひとりでもあり、キリスト教と師の遺訓を熱心に後輩たちに伝えた。彼が晩年に口述した『クラーク先生とその弟子達』は、札幌農学校第二期生内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』と並んで、札幌農学校草創期のみならず、いわゆる

札幌バンド誕生の歴史を物語る第一級の史料である。大島のもうひとりの信仰の師は新島襄である。独立教会の人事等で助けを受けるうちに、信仰的にも人格的にも深い影響を受けた。やむなく札幌を去らざるを得なくなつた時、彼を支えたのは、新島への敬慕の思いであつた。大島は卒業後母校で教鞭を取るかたわら、独立教会の中心にあつて、これを牧したが、その後同志社、私立奈良中学校、県立山梨中学校(後の甲府中学)その他で教え、キリスト者教育者として、また言語学者としても知られた。戦後内閣総理大臣となつた石橋湛山は、大島の甲府時代の教え子であり、彼の人生は大島との出会いによつて変えられたと述懐している。

新島と大島との交わりは、明治十年代の前半に始まるが、京都と札幌はいかにして結びつけられたのであろうか。

クラークは、札幌での任期が終りに近づいたころ、帰国の途上アマストに関係する日本人のいる京都と東京に立ち寄ることを考えた。京都には、「私にとつて日本人学生の一號」と呼ぶ新島がおり、東京には、アマストに一時学んだ来原彦太郎(木戸孝允の妹の子。後に木戸孝正と改名)がおり、またアマスト在学中の神田乃武の父がいた。「ボーイズ・ピー・アンビシャス」の言葉を残して札

幌農学校関係者と別れたクラークは、函館を経て海路長崎へくだり、そこから京都へ向つた。関西では多くの宣教師に会い、そして京都では念願の新島との再会を果たすことができた。新島と札幌農学校のキリスト者たちが、互いにその存在を知るにいたるのは、この再会を通してである。京都滞在の直後、クラークは第一期生たちのいわばまとめ役であつた佐藤昌介(後の北大総長)に手紙を書き、その中で、新島や関西の宣教師たちに札幌の「イエスを信ずる者たち」の存在を伝えたこと、彼らが札幌のキリスト者たちのために祈り続けるであろうことを知らせたのである。帰国後もクラークは札幌の教え子たちと頻繁に書簡を交わすが、第一期生内田澗への手紙の中で、日本でのキリスト教伝道の必要を訴え、「西京の新島牧師に手紙を書いて、日本語の宗教冊子を君に送るよう頼んで下さい」と、新島との具体的な連絡を勧めた。内田は早速筆を取り、新島に札幌のキリスト教活動の詳細を伝えた。この書簡は未発見であるが、新島の内田宛書簡の内容から、この書簡が存在したことが確認できる。こうして、クラークを敬愛してやまない札幌のキリスト者たちは、クラークから紹介された新島を、彼らのキリスト教活動のもつとも大事な助言者とみるようになり、新島も札幌を伝道の重要な一拠点と意識するようになつ

た。

新島が大島の名を書き留めるのは、史料のうえでは一八八四年(明治十七年)二月が最初である。この時上京していた新島のもとを、前年第三回日本基督教徒大親睦会で顔見知りとなっていた内村が訪ね、独立教会の事情を伝えた。大島の名は、内村らとの相談の席で出た。新島の二月二日の日記には、「金森ノ来ル事ヲ望ム、大島正健ト交替スルノ議起ル○非常ノ謙遜家ナルヨシ」とある。常駐の宣教師や牧師のいない新開地札幌に誕生した独立教会は、創立者である一・二期生の自治、それも制度的裏付けのない自治によって運営されていたが、彼らの就職・転任・国内外への留学等によって、自治を支える教員構成に変化が生じていた。いきおい教会運営の責任は、母校に残っていた大島の肩のしかかった。内村を回宗へ導き、教会の独立に際しては内村と共に急先鋒であり、「ミッシヨナリー・モンク」との綽名をつけられるほど信仰熱心な大島ではあったが、仲間の離札の影響は大きかった。大島は助けを必要とした。金森通倫の名がどこから出たか詳らかではないが、彼を招聘する計画が、内村らから新島へ伝えられたのである。翌年春アメリカから小崎弘道へ送った手紙のなかで新島は次のように書いていた。

クラーク先生(札幌ニ農校ヲ起セシ人)ニ面談セリ、氏ハ日本好キノ人ナリ、殊ニ札幌ニハ甚熱心ノ人ナリ、兼テ独立自治ノ主義ヲ該会ニ吹キ込キ宣教師ト共ニ計ラス、又何ノ会ニモ属セス、上方ニアル兄弟ト連絡ヲ通シ向來ノ伝道ヲ計ルヘシト、兼テ該会ニ勸メオキシヨシ被談候、何卒当夏ハ札幌迄好キ援兵ヲ送り度モノナリ「此ノ好機會失フベカラス」、金森ヲス、メ七八ノ二ヶ月丈ケデモ該地ニ趣カル、様致タシ、貴兄ト海老名兄又伊セ兄、宮川兄か一致シテ之ヲ賛成アラン事ヲ切望ス

しかし、新島の努力にもかかわらず、金森を札幌へ送ることはできなかった。この間独立教会は、東京の一致教会から二人の伝道師の来援を受け、事態をしのいだ。新島が実際に大島に会うのは、一八八七年(明治二十年)七月七日のことである。このころ体が不調であった新島は、医師のすすめを受けて静養のため札幌を訪れた。駅頭には大島や、昔新島の国外脱出を助けた福士成豊らが出迎えた。新島は福士の用意した家でこの夏を過ごすことになる。大島が信仰のうえで、家族同士のつき合いのうえで、交わりを深め、大きな影響を受けるのはこの時のことである。翌日大島は、旅装を解いたばかり

の新島を訪ね、独立教会の問題で助言を求めた。数日後、新島は独立教会の礼拝に出席し、その日の日記に

此ノ日会堂ニ趣ク 堂ハ南三条西四五丁目ニアリ
堂ハ凡二百名ヲ容ルニ足ル(中略) 大島氏説教セリ。
懇切丁寧ノ勸メアリテ、予ハ如何ニモ如此純美ナル
福音ノ講説ヲ聞キ、大ニ此ノ地ノ為ニ喜ヘリ

と記した。この日新島は、クラークや内村から聞いていた札幌のキリスト者集団と彼らの教会を自らの目で初めて確認することができた。そして、制度的訓練を受けたことのない平信徒たる大島の福音理解と説き方に、驚きと賞嘆とを覚えざるを得なかった。独立教会の姿と大島の働きは新島の心を動かした。数日後、新島は宮川経倫と金森に宛て筆をとった。孤立状態にある独立教会への来援を訴え、北海道をパウロにとつてのマケドニアにさえたと言った。そして金森へは次のように書いた。

本日大島正健君(此人ハ教会ノ為尽力シ常ニ説教を負担スル人ナリ)ニ面会申候処、何人カ上方ヨリ該説教会ニテ同氏ヲ助ケ近傍ニ伝道スル人を要シ度呉々モ被申、又此事ハ已ニ教会ニテノ決議ニ相成中

略)我輩モ此孤立セル教会ニハ飽マデモシンパセーヲ頭ハシ、我教会ニ入ルト否トハ一切度外ニ置キ、只此地伝道ノ必要ナルヨリ我党内ヨリ一人働キ手ヲサクリフアイスルハ至当の事ナリト信ジ候(中略)大島氏依頼ノ事ハ黙々ニ附シ難ク乱筆以テ貴兄ト宮川、原田三兄ノ御周旋ヲ奉仰候

金森らは新島の意を体して動き、書簡中に名の挙つていた馬場(竹内)種太郎を説得した。三ヶ月後、馬場は新島の面接を受けて、伝道師として独立教会へ加わった。新島は、独立教会支援について「我教会ニ入ルト否トハ一切度外ニ置」く姿勢をとつたが、これはクラークの願いと大島たち創立者の志、そして独立教会独自の行き方への新島の理解と同情を物語る。

この夏、新島と大島の間は信仰的に深まっただけではない。新島夫妻と大島家の人々は頻繁に交わった。大島の長男正満(後に東大を出て動物学者となる)は、この時三歳であったが、新島は彼を「満ボウ」と呼んで可愛がり、彼は「新島の小父さん」をずっと記憶にとどめた。時は流れて、学者となった正満は論文出版のためピッツバーグを訪れ、カーネギー博物館でホランド博士と会見した。しかし、出版の見込みはなさそうであった。ところが会

食の席で、新島とホランドはアマスト大学で同室であり、勉強を助け合った仲であることが分かった。別れ際、ホランドは正満の論文の出版を約束してくれた。召天後三十年近く経って、「新島の小父さん」は「満ボウ」を、思いもかけない所で助けてくれたのである。この話は、戦後の小学校国語教科書『初等科国語巻八』の第三課に「めぐりあひ」と題して掲載された（これについては敬和大学の北垣宗治学長が『同志社アメリカ研究』別冊6に研究論文を寄せておられる）。新島は大島家の人々の記憶の中に懐しい慕わしい存在として生き続けたのである。

札幌滞在中、新島は恩人アルフィーアス・ハーディー永眠の訃報に接した。悲しみをおして札幌のキリスト者のために心を砕く新島の姿を大島は忘れることができなかった。新島は、もうひとつの問題でも大島の相談に乗っていたのである。大島の正式牧師資格を巡る問題である。新島来札の三カ月ほど前、大島は十一名の希望者に洗礼を授けた。聖職養成制度を経ず、按手礼も受けていない大島の授洗は、北海道在任の宣教師たちの非難するところとなった。たとえばアイヌ伝道で有名なバチエラは、大島への不快感を書き残している。諸事情を判断して新島は大島に按手礼を受けることを勧めた。九月中旬札幌を発った新島は、東京で数日を過ごす、その間

に在京キリスト教各派の代表者に会い、どの教派にも属さない条件で、大島に按手礼を受けさせるという約束を取り付けた。十月京都に戻った新島は、「何分此十二月ノ御休暇ニハ断然右オルヂネーション御決行之程奉切望候」と大島へ書き送った。翌年一月東京の一致教会で行われた按手礼には、植村正久、井深梶之助、小崎弘道、本多庸一などが立合い、異端等の問題が生じた時には組合教会が責任を引き受けるという条件で、大島のキリスト教界における正式認知が成った。三月新島が、独立教会員で札幌農学校第六期生の和田健三に宛てた返信から判断すると、独立教会員はこれを大いに喜んだ。しかし、大島自身の述懐によれば教会内の一部には、誤解としてこりが残った。それはともあれ、独立教会はこのころから、時には二五〇名もの出席者を数える隆盛期を迎えた。

大島の率いる独立教会は、この後数年内部では青年会や婦人会が盛んとなり、外へ向っては札幌近郊の拠点地にも伝道活動を展開した。この時期はまた、道庁所管となった札幌農学校が、帰国した佐藤のリーダーシップのもと、第二期生宮部金吾、広井勇、太田（新渡戸）稲造ら婦朝者の教員就任によって、拡充・発展する時期とも重なった。しかし、官立学校としての経営を考える佐藤の目には、札幌農学校教員である大島がキリスト教の牧

師を兼任することは、好ましいものとは映らなかつた。

一方、独立教会に属する札幌農学校卒業生の側からすれば、独立教会創立の途中で態度を曖昧にし結局はメソジスト教会員となつた佐藤の信仰姿勢は、理解しがたいものであり、のちのちまで佐藤に対してはその合わなさを感じ続けた。佐藤の大島に対する圧力は、一八九一年（明治二十四年）の内村鑑三不敬事件後、日本全体の国粹主義的反動の中で、一層強まったようである。不敬事件直前に脱会届を出していたとはいえ、内村は大島が責任をもつ独立教会の会員であつた。一八九二年（明治二十五年）四月、大島は遂に独立教会の牧師を辞任した。この年の九月、大島は予科学生を前に「我が先師ウィリアム・クラーク氏」と題する演説を行うが、高等教育機関としての拡充をはかる佐藤に対する、創設期の精神の再覚醒を願う大島の、精一杯の批判であつたと考えられる。

潔癖な大島には、母校は俗化しつゝあり、クラークの遺訓はないがしろにされつゝあると映つた。新島の興したキリスト教主義学校同志社のことが思われた。意を決した大島は、生前の新島との間に交わした約束を思い起こし、一八九三年（明治二十六年）十月、札幌農学校を去り、京都へ向つた。この時のことを彼は次のように記している。

俗人の手にゆだねられた北海道は青年の心を潔め其志を高らしむる能力を失つてきた。さればとて帰去來の辞を賦して閑雲野鶴を友とする年でもなし、基督信徒として我が志をなさんが為には如何なる途を選ばんかと独り思ひわづらつていたところへ、敬慕する新島襄先生の遺業を全ふせんが為に先生が心血を注がれた京都同志社を守り育てよとの命を受けた。骨を北山に埋むるつもりであつたが、形勢日に非なるを悟つた私はその招を神の命であると信じて快諾した。

快諾したと記してはいるが、札幌駅では彼をひきとめようと集まつた学生たちと涙で別れたのであつた。この別れがあつてまもないころから、札幌農学校では、長い間口にされることの少なかつた「ポーズ・ビー・アンビヤス」が、札幌農学校最後の日々の大島から薫陶を受けた学生たちによつて語られるようになった。漢詩をよくした彼は、別れを次のようにうたつた。

辞札幌

講道説文窮北郷 經過十有八星霜
無端今日試南下 豊水円山別恨長

北陲秋色思依々

枯杖辞家赴帝畿

知否阿爺無限愛

群兒縋袖問我帰

北遊十有八星霜

又整行装向洛陽

回首山河皆旧識

却疑蝦島是家郷

京都に着いた大島は、すぐに若王子に赴き新島の墓にぬかずいて、思いを七言絶句に込めた。大島は生涯この思いを抱き続けたのであった。

追悼新島先生

秋風北地接温容

為我嘗開星斗胸

偉業遺蹤人已逝

断腸相国寺辺鐘

(書き下し)

新島先生を追悼す

秋風の北地にて温容に接し

我が為に嘗て星斗の胸

を開けり

偉業遺蹤の人すでに逝きぬ

腸を断つ相国寺辺の鐘

に)

(恵泉女学園短期大学教授)

参考文献

『新島襄全集』 3巻、4巻、5巻

大島正健 『クラーク先生とその弟子達』 初版・補訂版、

佐藤昌彦他編訳 『クラークの手紙』 など